

全員が対話に参加できる問い合わせ

「みそ汁の紹介文としてどれがふさわしいか。」

私たちは、話し手に何かを伝えようとするとき、自分の都合で話をしてしまうことが多く、自分が使い慣れた言葉を選び、自分の話しやすい順番で会話を進めてしまう傾向があると言えるのではないだろうか。しかし、自分が伝えたいことを相手に伝えるためには、相手にわかってもらうための工夫が必要で、相手の視点に立って、どの表現を使い、どの順序で、どの内容を話すか考える必要がある。つまり、「他者意識」をもってコミュニケーションすることが大切であり、それこそが外国語科の本質につながるのではないかと考える。

この単元では、初めて日本の家庭料理を食べる留学生のマイクに、生徒が英語で料理を紹介するという内容を扱う。例えば、みそ汁について紹介しようとするとき、具材、作り方、味など、生徒によって紹介する内容が分かれるため、今、まさにみそ汁を食べようとしているマイクへの紹介文として、どの紹介文がふさわしいか選択させ、その理由について異なる考えをもつ生徒同士で対話をさせる。生徒に選択肢を与えて選ばせることで、全員が対話に参加できるように工夫し、対話を通して仲間と意見を交換し、情報を共有しながらより良い英語表現について考えができるようにする。

単元構成

時間	◆学習内容と問い合わせ (○) は全員が対話に参加できる問い合わせ、(☆) は学びをさらに深める問い合わせ
1	◆ 教科書のモデル（ハロウィーンや十五夜を紹介するスピーチ原稿）を読み、行事に関する紹介文を書くときのポイントについて考える。 【日本の行事を外国の人に英語で紹介するときのポイントとは】
2・3	◆ 日本の家庭料理を紹介するときのポイントについて考え、家庭料理の紹介文を書く。（ペア） 【日本の家庭料理を英語で紹介するときのポイントとは】 【日本の家庭料理の紹介文を英語で書こう】
4 (本時)	◆ 紹介文の内容や英語表現について吟味する。 【みそ汁の紹介文としてどれがふさわしいか (○)】 【相手の立場に立つとはどういうことか (☆)】
5 + 家庭学習 6	◆ これまでに学んだことを活かして、自分が紹介したい日本文化についての紹介文を書く。（個人） 【「ぜひ食べてもらいたい日本の食べ物」をテーマに英語で紹介文を書こう】 ◆ 紹介文を発表する。 【英語でコミュニケーションするときに大切なこととは☆】



単元のねらい

- ① 他者との対話を通して得た学びをもとに、自分の紹介文を推敲することができる。
(思考力・判断力・表現力)
- ② 日本文化を紹介することで、自国の文化について改めて考え、自国の文化を尊重することができる。
(学びに向かう力、人間性等)



【他者意識をもった英語表現について対話している様子】



何ができるようになったか

①について、生徒のワークシートを分析した結果、39名中32名(82.0%)の生徒が達成することができていた。以下に、生徒のワークシートの一例を示す。

This is miso soup.
Tofu and wakame are in it.
It's very healthy.
I often eat miso soup.

教科書のモデルからの気付きをもとに、英文を書いているが、基本的な情報にとどまっている。



Do you know this?

This is miso soup.

I often eat it.

It's very healthy.

Tofu and wakame are in it.

Tofu is made from soybeans and wakame is a kind of seaweed.

他者との交流を通して、問い合わせや tofu, wakame について具体的に説明を加えている。



Do you know this?

This is miso soup. We call it miso shiru in Japanese.

We often drink it.

It's very healthy.

Tofu and wakame are in it.

Tofu is made from soybeans and wakame is a kind of seaweed.

Mike, please have the bowl. Drink the soup, and eat tofu and wakame with your chopsticks.

「みそ汁の食べ方」について説明を付け加えている。また、eat と drink の意味の違いを意識して書いている。

②について、生徒の振り返りを分析したところ、39名中18名(46.1%)の生徒に自国の文化に対する気づきや捉え直しに関する記述があった。以下に、生徒の振り返りの一例を示す。

この単元を学習する前は、日本人だから日本文化なんて知って当然だろうと、思っていました。だけど、いざ紹介するとなると、あまり伝えることができませんでした。日本文化とともに生活しているけれど、逆に密着しそぎてしまっていて、無意識のうちになんでもしているということがわかりました。自分がいくら毎日、日本文化と関わった生活をしたとしても、無意識のうちに理解したのでは、本当に理解したとは言えないんだな、と感じました。

新たな授業へ挑戦しようとする先生方へ

教育者としての偉大な先達である、齊藤喜博。「島小学校」での多くの実践は全国的に評価され、提唱する「教授学」は一世を風靡しました。その齊藤喜博の半世紀以上前の著作から引用します。

よい授業には優れた芸術作品と同じような、緊張と集中がある。そこでは、学級のどの子供もが、みな自分を発揮し、わき目もふらず生き生きと活動し、みんなの力でつぎつぎと新しい発見をし合っていく。（中略）その学級の学習の中にとけこませ、いっしょに笑ったり緊張したり、発見したり、感動したり、新しいものを見いださせたりしながら、それぞれの心を新しく変革していくようにするものである。こういう授業を受けたことのある子供は、「勉強はおもしろいものだ」と、きっと思うようになる。みんなと力を合わせて、むずかしい問題にぶつかり、それを解決していくことは、どんなに張り合いのことだかということを知るようになる。「授業入門」昭和35（1960）年 国土社

これこそ「主体的・対話的で深い学び」が具現化した姿ではないでしょうか。60年近く前に上記のような授業が実現されていました。それなのに、なぜ今になって再び、「主体的・対話的で深い学び」が求められるのでしょうか。

上記のような授業が他の学校ではできなかつたからです。齊藤喜博という突出したカリスマ的な校長の指導がなければ実践できなかつた。だから齊藤喜博がいなくなれば、このような授業も消えてしまつたのです。では、齊藤喜博の指導はどのようなものだったのでしようか。同じ著作から引用します。

理科には優れた力を持っている中本さんが、もし教えることだけを考えていれば、いくらでもうまい説明ができたはずである。だが、中本さんは、子供たちにじっくりと考えさせ、子供たちの考えが熟しきるのを待っていた。子供たちが三年生なりに追究し尽くし、科学的認識へと到達していくよう授業を進めていった。だからそれがうまくいかないとき、悲鳴が出るのは当然のことだった。中本さんは自分の持っている知識を、ただ子供に説明し教え込むという、教師らしいやり方でなく、子供たちに真理の発見への追究をさせようとした。私はこういう態度が貴いのだと思っていた。（中略）中本さんのような授業をやれば、授業はいつでも冒険の連続になる。（中略）子供に発見させ、追究させる授業は、結果がどうなるか分からないから、冒険的であり、常に不安のつきまとうものである。

「子供に発見させ、追究させる授業」とは、つまり「主体的・対話的で深い学び」です。そしてそれは、「結果がどうなるか分からないから、冒険的であり、常に不安のつきまとうもの」なのです。これこそが斎藤喜博の実践が途絶えてしまった原因です。日々「うまくいかないとき、悲鳴が出るのは当然」という状況に耐えなければならないのです。強い指導がなければ続けていくことはできません。

でも、私たちはあえて「生徒に任せる」実践にこだわりました。それこそが「主体的・対話的で深い学び」を実現する唯一の道であると考えたからです。そして、「結果がどうなるか分からない」という状況を少しでも改善するための手段として、「問い合わせ」と「単元構成」を提案しています。

実践されるにあたって、一つお願いがあります。それぞれの「問い合わせ」を目の前の生徒に投げかけたとき、その反応が「沈黙」であるかもしれません。それでも生徒の「発言したいという意欲」を信じて、1分間、先生は発言せず待ってほしいのです。そこから新たな展開が始まる可能性があるからです。

そして、リーフレット冒頭でもお願いしていますが、実践されましたが、その結果をお教えください。もちろん私たちの研究は不十分なものです。うまくいかないことの方が多いかもしれません。それも含めて、お教えいただければ本当にありがたいと思います。なお、このリーフレットの内容は、本校ホームページにも掲載しています。先生方の授業改善に少しでも役立てば幸いです。

平成30年3月

香川大学教育学部附属坂出中学校

副校長 小林理昭



平成28・29年度 文部科学省委託事業
「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの
学習・指導方法の改善のための実践研究」
「主体的・対話的で深い学び」のある授業～問い合わせと単元構成 教科ごとの事例集～

発行年月 平成30年3月発行
編 集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL : 0877-46-2695 FAX : 0877-46-4428
<http://www.sch.ed.kagawa-u.ac.jp/>
mail : sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp